

信を通す

2

君の力を信じている

恩師からの葉書



俳優 児玉 清氏
(こだま・きよし)

著作権の関係上、表示できません。

俳優の道に入ってから来年で五十年を迎える。今更の如く、来し方を振り返ると様々な思い出が甦り、感慨も一人のだが、その度に鮮烈に頭を過る一通の葉書がある。

僕が俳優になったのは予期せぬ出来事からであった。ドイツ文学科の大学院に進み、その道で人生を歩もうと考えていた矢先の大学の卒業式当日、突然に母危篤の知らせで病院へ駆けつけたのだが、数時間後に母は帰らぬ人となった。肝硬変の悪化であった。

母の死でわが家の状況は一変し、俄に僕は世に出ること、つまり就職を決意せざるを得なくなった。しかし、すでに四月に入っていた

ため、どこの会社を訪ねても新入社員を入れたばかりで来年の卒と一緒に試験を受けるようにと言われ途方に暮れた。このとき迷い込んできたのが、東宝映画の「ゴッフェイス」試験の通知であった。

詳細な経緯は省略するが、偶然のハプニングが重なって試験に合格してしまった僕は、来年の企業への入社試験までの仮の住いの

つもりで専属俳優となったのだが、それが今日まで続くことになったのは、僕の大学の恩師からの一通の葉書にあった。

恩師の名は桜井和市先生。ドイツ文学に入学以来薫陶を受け、心底尊敬した先生であり、厳しい顔の裏に隠された温かくも優しい心に、いつも感謝の気持を抱いていたのだが、家庭の事情からドイツ文学の道から心ならずも外れてしまったことに、僕は恥ずかしい思いで、いや期待して下さっていた先生に大変申し訳ない思いに苛まれていたのだ。そんな思いを一変させてくれたのが先生からの一通の葉書であった。

桜井先生の葉書には次のように書かれていた。「いずれの道も歩むも同じ、ベストを尽くせ。君の力を信じている。」短い文章であったが僕の心は奮い立ち、感激に胸が震えた。迷い込んだ道でやや途方に暮れ、挫けかけていた僕の心に勇気の灯が点ったのはこの一通の恩師の葉書によつてであった。爾来、先生の言葉は半世紀の間、僕の胸にいつも鳴り響いている。